
続・白衣のバンパイア

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・白衣のバンパイア

【Nコード】

N8913S

【作者名】

月乃宮

【あらすじ】

福永たからは大学病院の看護婦。でも実は彼女は白衣の天使、もといバンパイアなのだ！ そんなたからは外科の瀬良先生に誘われて、人生初のデートへ。しかし着いたお店で、たからは思わぬものを口にしてしまい……『白衣のバンパイア』の続編です

「いかにいかに、いつかー！ーん！」

おかんむりな父の声が、夕食の終えた我が家のリビングに響き渡った。

口ヒゲを震わせてソファに座る父のかたわらには、お茶を手にして目を丸くしている母。その向かいに座る私はクッションを抱え、ムツとして父をにらみつける。

「なんでよ。瀬良先生はちゃんとした人だよ？ 外科医としても腕がいいってウワサだし」

「ちゃんとした人って、よく知りもしないでなぜ分かる？ 大体ウワサなんかあてにならない！」

「だーから、よく知るためにも一度デートしてみるって言うてるんじゃない」

「それがいかなのだ！」
「なんでよ！」

父と言い合いを続ける中、やんわりと割って入ったのは母の一言だった。

「お食事に出かけるくらい、かまわないんじゃないかしら？」

すると父はギョツとしたように母を見つめた。

「か、母さんは自分の娘がどこの馬の骨とも分からんやつ毒牙にかかるのを、黙って見過ごすと言うのかね！？」

「そんな大げさな」

苦笑をもらす母に、私は味方をつけたとばかり心の中でガッツポーズを作ったその時。

「それで、その馬の骨はいくつぐらいの男なんだい？」

背中から響いたテノールに、私はギクリとして固まった。おそろおそろ振り返ると、後ろにはいつの間にか帰宅した一番上の兄・幸兄さんの姿があつた。会社から帰ってきたばかりらしく、スーツにネクタイ姿で腕組みしているのが妙に迫力ある……。

「おかえり、なさい、幸兄さん」

「だから、デートの約束でもあるの？」

「う、うん…… 食事に誘われたの」

「なるほど、それで父さんが興奮してるのか」

「み、幸！ お前もたからに言っただけでやってくれ、男と付き合うなど十年早いつてな！」

幸兄さんは三人掛けソファに座る私の隣に腰を下ろすと、それは優雅に足を組んでみせた。柔らかい物腰なのに、どこか迫力がある幸兄さんのオーラに、父の姿勢も自然とまっすぐになる。

「父さんも、たからがこの先パートナーにめぐまれないと心配ですよっ？」

「そ、それはそうだが……でも」

「僕はいい傾向だと思いますけどね。たからも成人を迎えたい、いつまでも動物の血に頼ってはいけませんよ。身体に良くないでしょう」

「う、ううむ……」

幸兄さんの言葉に私はホツとした。家族の中でも一番発言力が強

い幸兄さんを味方につければ、もう勝ったも同然だ。それにしても……実の息子に言い負かされるってのも、父親としてどうよ？

私は口ひげをくねらせて眉尻を下げる父を見てちよっぴり……ほんのちよっぴりだけど……かわいそうになっちゃった。

それにしても瀬良先生と食事に行くだけで、どうしてこんな騒ぎになるんだか。正直に両親に話す私も私だけど、やっぱり我が家の特殊な事情を考えると避けて通れないのよね。

なんていつても、うちは普通の一般家庭と違うバンパイア一家だもん。

将来のパートナー候補？になるかどうか分からないけど……とにかく異性と付き合っちゃって、別の意味が含まれる。

それが『血液を提供してくれるパートナー』になる可能性。うちの場合、母を除く全員がバンパイアの血を引くから、付き合う相手は慎重に吟味する必要がある。

でもさあ。

「私だって普通のデートぐらいしてみたいよ……」

ポツリとつぶやいた私の言葉に反応したのは幸兄さんだった。

「たからも年頃の女の子だからね。僕は賛成するよ」

「ホント!？」

「ただし」

今まで数々の女性たちを虜にしてきた幸兄さんの端正な顔に不気味な微笑みが浮かんだ。

「たからを振つたりしたら……僕が八つ裂きにしてやるけどね」
「！」

「そ、そうだぞ！ パパだってゆるさんからなっ！！」

えええ〜そんなあ。バンパイアの血が濃い幸兄さんが言うつとシヤ
レにならないよお。

幸兄さんが本気になったら、下手すると病院送りになっちゃう……
…あ、でも医者だから大丈夫かな……って、そんなのカンケーない
つて！

その時玄関から「ただいま〜」という二番目の馨兄さんかおるの声。

「ああ腹減つた〜、メシなに？」

馨兄さんののん気な口調に、その場にいた全員の張りつめた気が
一気に抜けてしまった。唯一、すぐに立ち直った母が「今夜はサバ
の味噌煮よ」と台所へ向かうべく腰を上げたのだった。

瀬良先生に誘われて待ち合わせたのは、先生の休日と私の早番の
日が重なった六月某日。『今度、食事誘っていい？』と言われたあ
の日から、実に二週間が過ぎていた。

先生は外科医で、私は看護婦……お互い仕事で忙しい身だからし
ようがないよね。

でも本当に連絡くれた。嬉しい……

初めての（そう、なさけないことに）デートのお誘いに浮足立つ私に対し、「サプライズだから」と言って先生が連れられてくれたお店は予想外の場所だった。

「……すっぱん料理？」

「食べたことある？」

「いえ、ないですけど……」

先生は「滋養強壮にいいんだよ」と笑いながら、高級そうな店舗の暖簾のれんをくぐった。まあ、別にお洒落なフランス料理とかイタリア料理とかじゃなきゃだ、なんて贅沢言わないけど……なんて渋いチョイスだろう。こういうところが変人って言われるゆえんなのかな。

予約してあった席に着いて、先生と向かい合わせにメニューを開く。

「何飲む？」

「そうですね、ええと……」

と、そこで私の眼はメニューリストのとある項目に釘付けとなってしまう。

『すっぱんの生き血』？

「ん？どうしたの？」

「あ、あの、いいえ……」

私はふるふると首を振った。

心臓がばくばくと早鐘を打っている……ただの偶然？ それとも故意に？ まさか、勘ぐり過ぎだよね……ははは。

「せっかくだから、すっぱんの生き血飲んでみる？ お酒で割ってあるから飲みやすいよ」

「えっ、先生飲んだことあるんですかっ!？」

先生はにっこりと笑ってうなずいた。

「じゃあ、飲んでみようかな……」

そうか、すっぱんの生き血か。そうかそうか……その手があったとはね。

今までコソコソ飼育室でラットの血を飲んでいた私は、どうしてそれを思いつかなかったのだろうか？ すっぱんの血ならフツーに飲み放題？ じゃないの。

そういえばものすごく昔に、すっぱんの生き血を飲むって話を聞いたことあった気がする。それで父に「飲んでみたい」って言ったんだっけ……そしたら「子供は飲めないんだよ」とか言われなかった？

それで「なーんだ」ってあきらめて、それきりずっと忘れてたんだ。

目の前に置かれた、小さなグラスに入っている赤い液体。なるほどね、お酒で割ってあるから子供は飲めなかったんだね。

でも今の私は、幸兄さんが言ってた通り成人した大人だもの。ものすごく強いってわけじゃないけど、お酒だって普通に飲める。

「ほら、大丈夫だから」

「あ、はいっ、いただきます!」

「どうやら先生は、私が飲むのをためらっているかと思っただけだ…
…そうよね、普通ためらうよね。なんてったって生き血だもん。」

口につけると、少し甘い香りがした…：…コクコクコク、と喉を鳴らして一気に飲み干す。お酒で割ってあるから少し味が薄いけど、身体には効果ありそう。うーん、なんだか気持ち良くなってきた。

「福永さん？ 大丈夫?」

「え、なにがれすか?」

「なんだか目が座っているようだけど…：…まさか、お酒弱かった?」

「いーええ、ゼーんぜん、だいじょうぶれすよ。あ、これおいしそー、いただきますーす」

いつの間にか並んでいた料理に箸を伸ばした。私は心地良い気分のまま、パクパクと次々ほおぼる。時折、心配そうに私を見ている先生の視線に気づいたけど、その度に「全然へいき」と繰り返した。先生って心配症だなあ、なんか焦ってる先生が妙に可笑的い。

「どうして笑ってるの?」

「だあーって、先生おかしーんだもん」

ケラケラ笑うと、先生も一緒になって苦笑した。今夜は眼鏡を外している先生は、笑うとちょっと若く見えてなんだか可愛い。

食事もあらかた終わり、気がつくとも私たちは店の外を並んで歩き始めていた。なんかやけにあっさり終わっちゃったなあ、食事デート…：…出かける前、あんなに緊張していたのがウソみたい。

「福永さん大丈夫？　なんか足もとがふらついているよ？」

そう言っておたおたと手を差し伸べてくれる先生がたまらなく可愛い。私より年上で、私よりずっと背も高い男の人なのに、可愛いなんて思っるのは変かな？

「気分はどう？　変じゃない？」

「変って、私がいすかー？」

「どうやら随分酔っちゃったみたいだね」

「へーきれすよお……あー風がきもちいー」

「仕方ないな。ちよっとその公園で休んで行こうか。あのベンチに座ってて。何か冷たいもの買ってくる」

指で示されたベンチへたどり着くと、ふわつく身体をドサリと横たえる。仰向けに寝っ転がったら、天上に綺麗なお月さまが見えた。

「あーきれい……あれ、先生はどこ？」

ガバツと身体を起こして周囲を見渡す。先生がいない。
焦る私。

「せんせー、せんせー、せんせー……」

なんでだろ、どうしてこんなに変な気分なんだろ……酔ったの？
そんな、お酒なんてほんのちよっとしか飲んでないのに……なの
にどうして？

待てよ……本当にお酒に酔ってるの私？

遠い記憶が再びよみがえる。

確か……父が言っていた気がする……すっぱんの生き血は子供には駄目だよ。酔っ払ってしまうから、って。

すっぱんの生き血で酔っぱらう？ まさか、コレがそうなの？

ああ駄目だ……頭がぼおっとして思考がまとまらない。とにかく先生探さなきゃ。先生はどこなの？

「せんせー、せんせー」

「福永さん！」

突然、目の前に先生が現れた。手にはペットボトル。よかった、先生が見つかった……一人だったらどうしようかと思った。なぜかこみあげてくる感情に、私は思わず先生に飛びついていた。

「うわっ！」

ガッターンと派手な音がして、よく見ると……私の下で先生がつぶれていた。

ああ先生、ごめんなさい！

すべてはこの、酔っぱらいの私が悪いんです！！

「痛っ……福永さん、無事？」

「は、い……」

「そっか」

そこで、先生は「よかった」と苦笑した。ああ、今夜は先生のこんな顔ばっか見ていた気がする。ごめんなさい先生、私がこんな風

に酔っ払っちゃったからですね。

急にしゅんとなつてうなだれる私に、先生は不思議そうに首をか
しげた。

その次の瞬間……

ふわり、と立ちこめた甘い香り。

何よりも私をつつとりと酔わせる、この香りは……

私の視線の先に気がついた先生は半身を起こすと、すりむいた手
首を持ち上げて眉をしかめた。

私の視線は、そのにじむ血にもう……く、ぎ、づ、け。

ガシツと先生の手をつかむと、その傷口に唇を寄せた。そのまま
舌でゆつくりと血をすくい取る。

「んん……福永、さん……」

ちゅ、と傷口に吸いつくと、甘くみずみずしい血に混ぜって微か
に泥の味がした。それからすりむいた箇所全体を、舌で丁寧に舐め
る。

名残惜しげに口を離すと、私はそつと先生を見上げた。

「せん、せ……」

どうしよう、意識が覚醒した。

頭は超クリア、酔いも完全に覚めてるみたい。なんで!?
もしかして、もしかしなくても、先生の血のせい?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8913s/>

続・白衣のバンパイア

2011年5月28日13時41分発行